

試験問題

日本で庶民層にまで電話が普及したのは第二次大戦後のことです。とりわけ、1970年以降の伸びは顕著で、1973年には2世帯に1台の割合にまで設置が進みました。

別紙の【問題文】には、電話が徐々に普及し始めた頃から、携帯電話が当たり前になった現代までの家庭の変化について論じられています。これを読んで、家族のあり方がどのように変わってきたと考えられるか、【問題文】の内容をふまえて1000字以内で述べなさい。

## 【問題文】

電話普及以前に、電話機を自宅に設置した家の主は、しばしば、近隣者の依頼に応じて、「電話の取次ぎ」を引き受けることが多かった。そして、こんなとき、受信を伝える格好の伝令として、子どもが選ばれることがあった。そこで、選ばれた可憐な使者たちは、一刻も早くと小走りに急ぎ、「〇〇さん、電話です」と大声をあげて取次ぎの役目を果たすことになる。

恐らく、使者役を引き受けた子どもたちは、「電話」という先端技術のために幼いながら一役買っているという誇りに支えられ、他の用件に勝る独特の喜びに駆られつつ、忠実に胸を張りさえしてその役割を果たすのが常であった。途中で遊びほうけて、取次ぎを怠ったなどという例を聞くことがないのも、彼らに抱かれていたこの誇りと使命感のゆえではないか。一方、取り次いでもらった大人たちは、息せききった子どもの使者を前にして、「ご苦労さま」とその労をねぎらったであろうし、時には、飴玉の一つも手に握らせたかも知れない。

(中略)

各戸に電話が普及したことにより、電話連絡によつて形成された近隣共同体は解体し、その代わりのように、電話機器を媒介とした家庭構成員と外部との情報網が成立して、同時に、一見相反するかに見えるが家族内の情報も共有されることになった。しかし、それは、家屋内の電話機器の置き場所が変わるにつれて変化を遂げ、形成されはしたがほどなく消える運命のネットワークであり、情報の共有のされ方であった。

家庭内に電話が導入された当初、それは、しばしば、玄関におかれた。このことに関して、玄関が家屋の内外を隔てると同時にそれを繋ぐ場所でもあることを考えるなら、そこは、まさしく「電話」の置き場所としてふさわしかったと言えるのではないか。なぜなら、「電話」は、家の内に住む人々と家の外の世界を繋ぐメディアであり、内部の人々を外部へと誘い出す「窓口」でもあったからである。

(中略)

しかし、それでいて、玄関に置かれた電話機は、そこが居間から隔たった場所であることで、家族相互の連携を促すという奇妙な役目も果たしている。たとえば、電話のベルが鳴ると、家族の誰かが立ち上がって取次ぎの役目を担わなければならないが、その役目は、概して主婦が担うものであった。したがって、ベルが鳴ると反射的に立ち上がって、電話機の置かれた場所まで出ていくのは主婦である場合が多い。そこで、彼女は、受話器越しに受信者名を確かめ、「あなた、会社からお電話です」、あるいは「〇〇ちゃん、お友達からですよ」などと家族の誰かを呼び出すことになる。

結果として、取次ぎに出た彼女は、伝えられる情報の内容は把握し得ないながら、いま、家族内の誰かに電話をかけてきたのは誰某なのか、あるいは、その電話に誰が機嫌よく応じているかなど、情報の周辺にまつわる片々たる細部に関してはよく察知することができた。そして、時には、家庭の主宰者に特有の「勘」を駆使して、いま家人の職場で何が起きているのか、あるいは、わが子の親友は誰であるのか、など、おおまかにその周辺事情を把握することもできたのである。こうした状況の持つ意義について、当事者であった人たちは、恐らく、何ほどの自覚も持っていなかったかも知れないが、しかし、後に子機が開発され、さらには携帯の時代に入つて、家族間の無意図的な情報共有路線が破壊されたとき、その意義が改めて意識化され、その喪失が

惜しまれることになったのであった。

さて、「電話の居場所」に話題を戻せば、当初、玄関に置かれた電話機が、やがてリビングルームと呼ばれる居間や、ダイニングキッチンと呼ばれた食事室兼官所の周辺に置かれるようになり、以前にまして長いコードが付けられるようになった。受信者が居間に置かれた受話器を手に取り、居間の快適な住環境のなかで、たとえばソファに腰掛けたまま相手との応対を続けることが容易となったため、長々と気ままに会話し続けることも可能となり、同時に、会話はすべてそばにいる家族の者たちに共有されることになった。電話が用件を伝えるだけのものではなく、「おしゃべり」の道具となっていくのも、また、「長電話」をめぐって親子の間に葛藤が起こったりするのも、このころからである。

(出典： 本田和子『子どもが忌避される時代』新曜社、二〇〇七年、二二四～二二八頁。  
ただし、一部改変。)